



記事

人文地理学の進歩 2018年 42巻(2) 244-

263

© The Author(s) 2016 Reprints
and permission: sagepub.co.uk/journalsPermissions.nav
DOI: 10.1177/0309132516677177
journals.sagepub.com/home/phg



デジタルワークのフェミニス ムの地理学

リジー・リチャードソン

ダラム大学 (英国)

要旨

フェミニズム思想は、「仕事」の本質主義的かつ規範的な分類に異議を唱えている。したがって、フェミニズムは、デジタル・ジオグラフィの理論的・実証的焦点として、「働く空間」に批判的なレンズを提供する。デジタル技術は労働活動を拡張し、強化し、職場の境界を出現させる。このような出現は、働く経験の両義性、つまり仕事を通しての肯定や否定の可能性を高める。デジタル地理学は、親密さの両義性についてのフェミニストの理論化を通して提唱される。デジタル技術を使って仕事をするものの創発的な特性は、身体と機械が「工作中」であることの可能性を感じるポストワークの場のインティマシーを通して空間を作り出す。

キーワード

デジタルジオグラフィ、経済、フェミニズム理論、親密さ、仕事

はじめに

ことで、こうした文化的視点に貢献するものである。

デジタルは地理学において、さまざまな観点から探求の焦点となってきた。GISや空間的知識、デジタル格差と開発、コード／空間、ロボット、ビッグデータ、統治形態など、ソフトウェアと空間の相互作用について考察してきた (Del Casino Jr, 2015; Graham, 2011; Kitchin and Dodge, 2011; Kitchin, 2013, 2014a; Kleine, 2013; Wilson, 2014)。デジタル・テクノロジーの差異化された物質性や、生活体験との関係もまた、取り上げられてきた (Ash, 2013; Kinsley, 2014; Kirsch, 2014; Leszczynski, 2014; Rose, 2015; Wilson, 2011, 2012)。本稿は、地理学者が「より主張的に」議論に貢献するための手段として、デジタルに関するフェミニスト的な地理学的分析 (Elwood and Leszczynski, 2011; Kwan, 2002, 2007; Leszczynski and Elwood, 2015など) を構築する

デジタル経済」をめぐる議論に「より積極的に」貢献する手段である（Kinsley, 2014: 378）。

グローバル・ノース」の（限定された）視点から¹、私はフェミニズム批評が、仕事の地理学におけるデジタル・テクノロジーの役割を理解するための重要な分析レンズを提供すると主張する。これらのテクノロジーは、仕事としてカウントされる活動の *拡張* を、労働慣行の *強化* とともに実現し、職場の境界を *出現* させる。デジタル・ワークとは、デジタル製品を作ることに加え、デジタル・テクノロジーを通じて労働活動を拡大・強化する、より広範な実践を含むものと理解される。

筆者

リジー・リチャードソン、ダラム大学地理学部、サウスロード、ダラムDH1 3LE、イギリス。

電子メール: elizabeth.c.richardson@durham.ac.uk

地理学者にとって興味深い。仕事に対するこのような（技術的な）変化は、*両義的*であり、肯定と否定の機会を提供する（Beck, 2000; Hardt, 1999; Negri, 1989; Sennett, 1998など）。肯定的には、仕事はユートピア的な要求の基礎を提供し、創造的な充足として経験されるかもしれない。否定的には、過剰な労働が搾取として経験される場合は特に、仕事の削減がワーク・ライフ・バランスの主張を支える。したがって、私の目的は「デジタル」を否定することではなく、それがテクノロジーと仕事に関する理解における「フェイズ・シフト」を示すものだと言明することである。また、フェミニズム批評がこのような仕事にアプローチする唯一の方法であることを示唆するものでもない。むしろ私は、デジタル技術を用い、またデジタル技術を通じた仕事の創発的な特性に対する批判的視点として、フェミニズム思想⁽²⁾の豊かさと複雑さを示しているのである。仕事に対するフェミニズムの批評は、このような労働活動の拡張と強化を通して明確化されてきた。

フェミニストを動機づける問題は、「仕事」としてカウントされるものを越えて、またその中で、さまざまな労働体験が出現することである（Cameron and Gibson-Graham, 2003）。そのため、多くのフェミニスト批評は、仕事の時空間的な境界線に挑戦することで、例えば、仕事を「社会的再生産」にまで拡大することで、また、「感情労働」の形態を通して労働活動がどのように意図化されるかを強調することで、活動してきた（Hochschild, 1983; McDowell, 1991; Pratt, 2004）。異なる差別化された労働慣行を前景化することで、何が仕事としてカウントされるかを問うことで、フェミニストたちは「職場」がいかに両義的であるかを示してきた。家庭」は、例えば様々な愛の労働から得られる快楽のように、労働経験が肯定的であると同時に、そのような労働は報酬を得られず、それゆえ潜在的に搾取的であるため、否定的でもありうるパラダイミ的な場として機能してきた（Boris and Parreñas, 2010; Pratt, 2012）。このように、フェミニストの要求は、「女性の仕事」というカテゴリーを肯定的に認識することを求めると同時に、「女性の仕事」がいかに差別化された性質を持っているかを示してきた。

フェミニズムの要求は、「女性の仕事」というカテゴリーを肯定的に認めることを求めると同時に、仕事の差別化された性質が、いかに直接的なカテゴリー分けを否定するかを示してきた。したがって、フェミニズム批評は、デジタルワークの両義的な出現を考察する方法を提供する。フェミニスト的なアプローチは、デジタルワークプレイスの出現した特性が、いかに充実した包括的な経験をもたらすか、しかし同時に搾取的で孤立した経験をもたらすかを理解する助けとなる。具体的には、仕事の両義性によって発展するデジタルの地理学のフレームとして、*親密さ*が提唱されている。フェミニストによる親密さへのアプローチは、生産的であると同時に破壊的でもあるという両義的な可能性を強調し、デジタルワークが充実していると同時に搾取的である可能性に対応する（Pratt and Rosner, 2012）。親密さは、私的で近しく、公的で遠いという矛盾した空間感覚を通して生じる（Berlant, 1998）。このように私は、親密さを通して労働空間が広範かつ集中的に出現するデジタルの地理学について主張する。

親密さを通してデジタルのワークプレイスを知るということは、その行為化の曖昧さに同調することであり、ここでは、仕事をしていることがどのように感じられるかを通して、労働の限界の確立、変位、超越が起こる。知識が経験を通じてどのように展開するかを強調することで、デジタルの親密な地理学は理論と実践を組み合わせ、「働く空間」を知ることと「職場」を変えることを結びつける。本稿ではまず、デジタルワークの地理は両義的であるという主張を実証する。デジタル技術が、仕事の肯定と否定の可能性を秘めた、仕事の拡張と激化をもたらすことを示す。第二に、フェミニズム批評の方向性が、このような仕事の延長と強化の両義性を通して明確にされる二つの「動き」に従っていることを考察する。反本質主義的」な動きは、延長の形態を通して仕事の特異な場所に挑戦し、「反規範主義的」な動きは、強化の様式を通して仕事の特異なパフォーマンスに疑問を投げかける。第三に、フェミニスト思想の一連から、デジタル・ワークの親密な地理学を発展させる。

デジタルワークの親密な地理学。デジタル・ワークの出現的な特性は、身体と機械が「アット・ワーク」であることの可能性を感じるポストワークの場の親密さを通して空間を創造する。

II デジタル・ワークの地理学

ソフトウェア、計算システム、デバイスの形態による空間の「飽和」は、地理学者によってますますよく知られるようになっている（Kinsley, 2014参照）。例えば、地理位置情報データの価値、「スマートシティ」の生産性、デジタルインフラの提供などである（Graham et al.）しかし、このようなデジタル経済が行われる具体的なプロセスについては、あまり調査されていない。人々、そして彼らがどのようにこのようなテクノロジーとともに、またテクノロジーを通じて生活し、生計を立てているのかは、もっと注目されるべきなのである。本節では、「現代のデジタル地理学に関する実証的な検証が比較的少ない」（Kinsley, 2014: 368）というこの問題に対するひとつの解決策として、仕事の地理学を提唱する。私はまず、デジタル・テクノロジーがいかにして仕事を「会社」というワークプレイスを超えて拡張させるのか、そして第二に、その結果、いかにして働く場所を実現するためにワーカーの実践が強化されるのかについて概説する。デジタル・テクノロジーによるこのような仕事の拡張と強化は両義的であり、仕事は自己搾取であると同時に自己実現でもありうる。労働の不安定性（Neilson and Rossi-ter, 2008）や「サイバータリアート」（Huws, 2003）の新しいさに挑戦する人々が指摘するように、デジタル・テクノロジーを通じて出現する、つまり不確かな労働の空間的経験は、例外的なものではなく、通常のものであるため、注目に値する。仕事を作るという行為を仕事を見つけるという制度に還元する「標準的な雇用関係」の安定は、「グローバル・ノースにおいて、白人男性労働者の割合が不均衡に高い、比較的恵まれないグループ」（De Peuter, 2011: 419）に拡張された経済的安全保障の形態であった。デジタル・テクノロジーが

したがって、エコノミック・フューチャーにアプローチするためには、デジタル・テクノロジーが「仕事を越えた」生活を組み込むことによって、このような「不安定な」ワーキング・ジオグラフィーを生み出し、また緩和していることを理解することが不可欠である。

1 仕事の拡張

デジタル・テクノロジーは、会社や公式の仕事場を超えて仕事を拡張したり、行わせたりすることを可能にする。以下では、仲介、共創、マルチロケーション・ワークという3つのデジタル・ワークの拡張の様式を紹介する。第一に、デジタル技術は労働市場を仲介することで、仕事の「アウトソーシング」の可能性を拡大する。これは、デジタル・プラットフォームを介した「仕事」の分担と配分を通じて起こる。これらのプラットフォームは、「下請け資本主義」の中で労働者の供給と雇用の法的条件の両方を形成する「労働市場仲介者」の役割を拡大する（Wills, 2009; Coe and Jordhus-Lier, 2011; Coe, 2013）。アマゾンのMechanical Turkが典型的な例であるクラウドソーシングの労働プラットフォームは、企業が「従業員によって社内代替的に遂行されうる仕事」を請け負う労働力を得ることを可能にする（Bergvall-Kareborn and Howcroft, 2014: 214）。このような群衆の活用は、アウトソーシングの形態を基礎とするものであり、企業が（単純な）「ヒューマン・インテリジェンス・タスク」を外部化するものである（Mullings, 1999; James and Vira, 2010）。デジタル・テクノロジーによって高められたこうした分散型生産の形態は、「オープンネス・パラダイム」（Ettlinger, 2014: 100）を構成し、「新たなコミュニケーション・ネットワークによって促進される分業の新たな階層」が「規制のないフリーランスの仕事」を伴う。第二に、デジタル技術は「共創」の可能性を開くことで仕事を拡大する。仕事が「社内」で行われるのではなく、「価値」が生産者と消費者のパートナーシップの中で創造される。

生産者と消費者の間のパートナーシップによって「価値」が創造され、両者の区別はさらに曖昧になる。このことは、創造的なメディア活動の形態（Banks and Deuze, 2009; Roig et al., 2014）において、「無償労働」、「ファン労働」、「視聴者商品」（Manzer-olle, 2010; Terranova, 2000; Scholz, 2013）といった用語が、「フェイスブックやその他の企業プラットフォームで費やされる時間が、単なる消費や余暇の時間ではなく、経済的価値を生み出す生産的な時間」（Fuchs, 2014: 98）であることを示すために喚起されてきた。デジタル・コンテンツの生産に加えて、共創には、オンライン（衣服）のカスタマイズ、インターネット・ショッピング、セルフサービスのレジなどの活動も含まれるかもしれない。これは、消費者が労働者として、あるいは「働く顧客」として理解されていることを意味する（Cova and Dalli, 2009; Gabriel et al.）

第三に、デジタル技術は、「職場」を超えて行われる「多拠点」労働の形態を可能にする。これは、テレワークやホームオフィスの増加（Avery and Baker, 2002; Greenhill and Wilson, 2006; John-son et al., 2007; Steward, 2000; Vartiainen and Hyrkka`nen, 2010; Vilhelmson and Thulin, 2001）を基盤としている。ネットワーク接続の可能性は「ホワイトカラー」の職場が相互的であることを意味し、「複数のワークス ケープ」（Felstead et al. 空港、ホテルのロビー、カフェのような場 所では、スペースの特徴とワークタスクの特徴 が相互に影響し合う、異なる「タスクとスペースの関係」を示している。モバイル」と「グローバル」な仕事（Cohen, 2010; Jones, 2008）は、モビリティがいかに関局的な空間経験を生み出 すかを示している（Cresswell, 2011; Hannam et al. このような「会社」の場所を超えた仕事の拡張は、「スペース」を「ワークプレイス」へと変容させる活動の強度を高めることになる。

2 仕事の強化

このセクションでは、デジタル技術がもたらす新たな働き方の両義性を強調する前に、仕事の強化について考察し、それが量的にも質的にもどのように理解できるかを示す。静的な場所がなければ、仕事のためにスペースを「固定」することができるように、より多くのタスクが必要となる。例えば、このような集中化には、「多拠点ワーカー」が一時的なワークプレイスをプロデュースするために投資する多大な労力（Hislop and Axtell, 2009）が含まれるかもしれない。このような労力には、デジタルテクノロジーによって可能になった同僚やクライアントとの相互作用の「永続的な調整」（Larsen et al. ワーク・ライフ・バランス政策は、携帯型モバイル・テクノロジー（Wilson, 2014）の継続的な接続性の論理によって誇張された、仕事の「オーバーフロー」と「激化」（Jarvis and Pratt, 2006）という長期的な問題への対応として組み立てられているかもしれない。これらの政策は、レジャーを含む他の活動と組み合わせで有給労働を正当化することを目指してきた。しかし、Perronsら（2006: 75）は、「生活」活動はケア・ワークの形態によって構成されることが多く、そのため、バランスは「暗示された調和のとれた均衡ではなく、全体として長い労働日数」につながると主張している。このような「バランス」の問題は、デジタル・テクノロジーによってより強固なものとなっている。そこでは、計算可能な次元だけでなく、「予測不可能」で「不安定な（……）ネットワークの時間性が（私たちの生活の）ほとんどすべての側面に持ち込まれる」（Hassan, 2003: 236）という「ネットワーク時間」の質的な結びつきによって、強度の増大が起こっている。オフィスが「常にオン」（Wainwright, 2010）であることを可能にするこのような強度の質は、均衡を保つ可能性に挑戦する「多様な接続の幾何学」（Crang et al.

ネットワーク経済とネットワークワーカー」(Hassan, 2003)は、仕事場を「区切る」ために、より多くの量の仕事だけでなく、質の異なる仕事も伴う仕事強化の形態を通して起こる。仕事場が説明のつかないまま「出現」する可能性があるとき、(潜在的な)労働者は「*解釈的(想像的)*」労働に従事し始めなければならない」(Graeber, 2015: 101, my emphasis)。職場は、「制度化された行動枠によって生み出される」(p.99)のではなく、いつどこで「出勤」するかを決める自己組織化された労働者によって、また、「労働活動」を構成する(しない)かもしれないものを想像することによって実行されるのである。このような労働者の自立と、制度的アーキテクチャーを超えて働く可能性を思い描く「精神労働」(Ross, 2000)との関係は、長い間、芸術作品の形態と結びつけられてきた。このようなアーティストの作家的実践が、「創造的な仕事」を通じて、より幅広い労働力層へと拡大することは、次のようなことを意味する：

人々はますます自分自身のミクロ構造にならなければならない、自分自身で構造の仕事をしなければならない。(McRobbie, 2002: 518)。

つまり、デジタル・テクノロジーが可能にする仕事の自己組織化は、自分の芸術と並行して自分自身を維持する(そして宣伝する)という集中的な芸術的作業を拡大するのである。デジタル・テクノロジーは、「知識」と「創造的」なエコノミーにおける仕事の「ファウンデーション・レス・サスペンス」と「永続的な不安」において、「ネットワーキング」(ナルディ他、2002)と「プロフェッショナル・クール」の重要性を深めている(Liu, 2004: 19)。このような「ネットワーキングは、継続的な雇用可能性を示すために必要な、付加的な労働形態である」(Gregg, 2011: 11)。このような不安の中での「クール」なパフォーマンスは、フェイスブックやLin-kedInのようなオンライン・ソーシャル・ネットワーキングによって強化され、自己の起業家的プロモーションの可能性を「仮想化」している(Flisfeder, 2015; Gregg, 2009)。

デジタル・ワークのこうした新たな特性は両義的である。形式的／制度化された職場を超えた仕事の拡張は、肯定的でもあり否定的でもあるような、より強度の高い仕事を要求する。デジタル・テクノロジーによる労働者の自由の可能性は、同時に、可能性のある労働条件を確保するために、より大きな仕事への愛着を必要とする。それは、「自律性の贈与に対する自己搾取と、柔軟性と引き替えの使い捨て」(Ross, 2008: 34)という対立規定を通して現れる不確実性である。したがって、上で概説したような共創的なデジタル・ワークの形態では、このような「自由労働」による剰余価値の搾取的な抽出という「マルクス主義的」な枠組みは、「親和的消費労働」の概念や、このような活動に従事することで得られる潜在的な親和感や楽しきとも読み替えることができる(Beverungen et al.)同様に、ワーク・ライフ・バランス政策によって労働時間のバランスをとったり制限したりしようとする動きは、「私生活が有給の追求よりも労力を要し、報酬が少ない場合、仕事の世界はさまざまな慰めを与えてくれる」(Gregg, 2011: 5)という可能性と隣り合わせにある。つまり、「仕事の世界を熱意と享楽に満ちた生活に近いものに作り変える」(McRobbie, 2002: 521)かもしれないデジタル技術を通じた(自己組織化された)仕事の創造的で肯定的な可能性は、同時に「保証の提供において[.....]より公正で平等でない」(Ross, 2008: 35)労働条件をもたらすのである。本節では、労働の両義的な拡張と強化に焦点を当てることで、デジタル経済の地理学を概説した。このような仕事の創発的な性質にアプローチするための批評的な語彙は、仕事の実践を通して仕事を变化させる理論であり、フェミニズムの地理学において以下のように辿られる。

III 仕事のフェミニスト地理学

フェミニスト批評は、労働の拡張と激化を利用して、以下のような労働活動の創発的特性についての政治学を概説してきた。

その両義性を強調することで、労働活動の創発的特性の政治学を概説してきた。フェミニズムの多様性を認識した上で、このような思想と実践が、「仕事」というカテゴリーへの包摂を求める主張が、労働活動を肯定する可能性と否定する可能性の双方を持つ、複雑な要求の政治学に関与してきたことに注目する。フェミニスト政治学は、既存の価値様式（すなわち「資本主義的賃労働」）の中での承認を主張するために、労働の拡張を強調してきたが、同時に、労働活動の強度が賃金関係を越えた代替的な立場をいかに要求するかを示してきた。そして、上に並べたデジタルの拡張と強化に関して、フェミニスト思想の中で探求されている重要な問題は、そのように認識されていない労働が、いつ、どこで肯定や否定のための空間となるのかということである。このことは、仕事が創発的であるときの認識の政治の可能性と限界を緊張関係で保持する。したがって、（経済）地理学におけるフェミニズムの伝統（例えば、Gibson-Graham, 1996, 2006; McDowell, 1991, 1997, 2015; Rose, 1993, 1997; Pollard, 2013）、その目的は「フェミニズムをジェンダーのアイデンティティ政治に還元する」ことではない（Wright, 2010: 60）。すでに明らかのように、フェミニズム思想は「女性の仕事」という状況化され体現化された闘争を出発点としているかもしれないが、こうした闘争の方向性は必ずしも特異な「ジェンダー化された」姿に従うものではない。このことを説明するために、仕事の創発的な特性を理解するのに有用な、フェミニスト政治学の2つの批判的な「動き」を概説する。いずれの動きも、フェミニスト・プロジェクトの多様性を代弁することを意図したものではなく、また、これから示すように、他の政治形態との交差がないわけでもない。これらの大まかな筆致を用いる目的は、フェミニスト思想が仕事にアプローチするために開いた行動の方向性のいくつかを示すことである。

1 反本質主義の動き

反本質主義の動きとは、一元的で首尾一貫したアイデンティティに疑問を投げかけるものである。マクダウェル（1993:

157）は、このフェミニスト的なアプローチを、「学問的地理学と称される知識体系の本質と構成に挑戦する」という目的のなかで実証している。経済に関わる一部のフェミニストにとって、これは仕事というカテゴリーの本質に疑問を投げかけると同時に、「資本主義が地球上で最も首尾一貫した強力な力であるという惑星のアイデンティティ」を拒否することを意味している（Wright, 2010: 61）。ここで紹介するフェミニストの反本質主義の読み方は、この動きが賃労働や「組織化された」プロダクションを超えた労働の拡張を扱う方法を前景化している。マルクスの解釈に基づけば、これは、資本が、労働の意欲を高めることなどを通じて「相対的に」ではなく、例えば労働日を延長することによって、「絶対的に」搾取しようとする方法として理解されるかもしれない（Witheyford, 1994: 89）。そのために、フェミニスト研究は、「資本」による価値抽出の場としての「生産」の絶対的な性質に疑問を呈してきた。搾取の根拠としてのマルクス主義的な生産批判を受け入れながら、フェミニスト思想は、家族労働や家事労働は「非生産的」であり、したがって搾取の場ではないという前提に異議を唱えてきた（Dalla Costa and James, 1972）。このような一見非生産的な活動を前景化することで、フェミニストたちは「『仕事における』価値の生産と労働力の社会的再生産との関係」を強調してきた（Mitchell et al.）したがって、子育てや家事労働を通じて、労働力の再生産における女性の役割は、「生産における賃金労働の搾取とはシミュルタネーに区別され、かつ補完的な搾取の形態」（Witheyford, 1994: 98）である。

労働の本質的な理解に疑問を投げかけるひとつの方法は、「差異を読み取る」（Gibson-Graham, 2008）戦略を通じて、労働に関する慣習的な枠組の優位性を弱体化させることである。この戦略の一例として、「感情労働」（Hochschild, 1983）という用語のように、労働を「再名称化」する戦術がある。この用語はさまざまに展開されながら

地理学者はしばしば、報酬のあるケア労働と報酬のないケア労働を区別する際の感情の役割に注目している (Boyer et al.)。このような反本質主義的な政治は両義的であり、仕事の否定であると同時に肯定でもある。一方では、(女性の)「非労働」の形態を労働としてカウントし、この活動を(二重の)搾取として理解することを要求している。労働が否定され、抑圧的なものとして理解され、したがって闘争の場となるためには、労働が認識されなければならない。他方、政治的闘争における主体性を実現するために、(女性が)労働者として数えられることが要求される。労働は、潜在的に破壊的な政治を実現するための手段として肯定される。したがって、反本質主義の動きは、一見首尾一貫しているように見えるが、本質的な(肯定または否定の)実体を持たないカテゴリーとしての仕事の「遂行」を暴露する。仕事は、ある種の安定性をもって喚起され、発生するが、同時にその境界を越えて広がり、絶対的なカテゴリー化を回避する。このことは、本質がないにもかかわらず、なぜこのような仕事の「パフォーマンス」が起こるのかという問いを提起する。仕事という行為には奇妙な歴史性があり、その多様な可能性にもかかわらず、「自分が行う行為、自分が演じる行為は、ある意味で、自分が登場する以前から行われていた行為である」(Butler, 2004: 160)ことを意味している。

2 反規範的な動き

社会規範」を暴露し、それに挑戦することを通して、反規範的な動きは、仕事という行為に対するこのような歴史性への反応として理解することができる。この動きは、「仕事と非仕事の現代的な曖昧さが、正常なもの、あるいは肯定的なものとして受け入れられ、理解されている」(Mitchell et al. ここで提示される「反規範性」の読み方は、仕事かどのように強められるかを示している。

仕事場」において、また「仕事場」を超えて、仕事かどのように強化され、特定の基準に従って育成され、育成される可能性のある、あらゆる種類の具体化された努力を含むようになったかを示している。この強化は、こうした基準、あるいは規範が同時に「仕事」を要求し、生産する方法から生じる。このような「生産」と「消費」の同時発生は、バトラー (1993) にとって、規範は安定したものではないが、それにもかかわらず、その規範的性質がまさに生産的(すなわち不安定)であるにもかかわらず、仕事を指示し続けるからである。バトラー (1993: 13) の言葉を借りれば、規範は「そのような規範として『引用』される限りにおいて」(働く)主体を形作るが、同時に、規範が強制する引用を通じてその力を得る」のである。このように、組織化された生産との拡大された関係としての労働に加えて、労働は規範の具体化と(再)生産を通じて自己との集中的な関係にもなる。The ongoing shaping of the (working) subject occurs through 'work' on the self, such that norms do not 'simply exist [. . .] "out there"' but instead are involved in 'how bodies work and are worked upon' (Ahmed, 2004: 145, my emphasis). 生産的な仕事と労働者の主要な関係としての、この規範的な「自己への働きかけ」は、創造的な仕事の特徴として McRobbie (2002) が指摘する個性化のプロセスに似ており、「生活」における「仕事」のより広範な強化の一部として認識されてきた。ワークライフバランスを求める政治的主張が示唆するように、このような強化は、単に「仕事」のタスクが量的に集中し、楽しい「社会的」時間の可能性が損なわれることではない (Burchell, 2006)。

集約化はまた、両者の概念的な区別が取り払われ、「仕事そのものが社会的な領域となり、社会的な必要を満たすための特権的な空間となる」(Donzelot, 1991: 251) 質的な転換でもある。この「社会化された労働者」(Negri, 1989) は、「彼女の仕事の中心的要素がコミュニケーション的な、コーディネートの作業を含む」価値創造の「遥かに複雑で拡大したシステムへの参加」によって「社会化」されている (Witthford, 1994: 251)。

(Wittheford, 1994: 95)。ネグリの立場をウィザフォードが読み解くことは、規範の体現を通じた仕事の強化が、介護と家庭経営の両立に必要な、感情的で結合的な実践に代表される「女性的」な性質を帯びると理解されうること示唆している。この「家庭」外の「宿題経済」では：

男性であれ女性であれ、仕事は文字通り女性的であり、女性化されたものとして再定義されている。女性化されるということは、極めて脆弱にされるということであり、解体され、再構築され、予備労働力として搾取されることであり、労働者というよりもサーバーとみなされることであり、有給の仕事のオンとオフの時間調整にさらされることである。(Har-away, 1991: 166)。

このように、必ずしも女性によって引き受けられるわけではないが、社会規範のテリトリーとしての仕事の強化は、仕事を女性的なものとして（したがって、このハラウェイの抜粋にあるように、ある程度はエンパワメントされないものとして）構築する。社会化された労働者であるために必要な規範的な「自己への働きかけ」を構成する「ミクロ構造」と「自己搾取」の形態（McRobbie, 2002）は、「女性の仕事」の形態の継続である。したがって、規範が働く主体と仕事との関係をどのように構築するかを考える上で、反規範的な動きは、仕事に対する、また仕事を通しての認識を求めるフェミニストの要求に対する課題を示している。まず、反本質主義の動きと同様に、反規範主義の動きは、仕事の両義性、つまり逆説的な否定と肯定を示す。仕事は規範的であり、抑圧的であるかもしれない自己管理の形態を通じて、働く身体を否定的に拘束することが示されている。

しかし、反規範的な動きはまた、*身体に対する規範的な仕事の不安定さ*を示し、したがって、こうした制約を超えて*仕事における身体*を形成する肯定的な可能性を示す。これは「仕事」を、女性たちが「自己の表象に参加すると同時に、女性の模範としての自己の表象を拒否する」活動であると仮定している。

ライト 1997: 278)。第二に、このように仕事の出現する激しさに焦点を当てることで、反規範的な動きは、仕事の量よりもむしろ質の政治性を強調する。労働活動がそのようなものとして認識されるように「数え」「足し算」（Cameron and Gibson-Graham, 2003）するのではなく、労働が内部的にどのように差異化されているかに焦点を当てるのである。つまり、仕事とは「オリジナルが存在しない一種の模倣」（Butler, 1991: 21）であるとすれば、フェミニズムの政治学は、認識によって力を与えられる可能性のある仕事の「オリジナル」な本質を否定することにあるが、同時に、そのような内的本質の外観がどのように異なって生産され続けているかを示すことにもある。したがって、仕事における「完全性の追求」（Cameron and Gibson-Graham, 2003: 152）に挑戦するこのポスト構造主義的な動きは、労働経験の否定（＝規範的な制約）あるいは肯定（＝代替的な台本化）として取り上げられるかもしれない。これは、バトラーによるデリダの差延の読解に見られる主体の否定と、ギブソン＝グラハム（2008: 614）による「新しい世界を生み出す」変容的な政治に見られる主体の肯定との区別である。フェミニスト地理学が仕事の創発的な特性にどのようにアプローチしてきたかを検証するこのセクションの締めくくりとして、私は仕事の質に焦点を当てることの重要性を強調する。デジタル・ワークプレイスの出現は、「仕事」の範疇で何がカウントされるかがオープンであることを意味し、次に論じるように、親密さの地理学を通して理解される、展開するデジタル・ワークプレイスに関する知識に位置づけられる政治学が必要である。

IV デジタルワークの親密さ

私は、デジタル・ワークの創発的な特性について概説し、フェミニズム批評がワークのポリティクスを通してどのように機能するかについて述べてきた。

その拡張と強化である。本節では、これらのスレッドを組み合わせて、フェミニズム思想がデジタル技術による仕事の出現にどのようにアプローチできるかを考察する。デジタル・ワークの地理学にとって重要なレンズとして、フェミニストによる親密性の理論化を前景に据える。親密さに対するフェミニストのアプローチは、肯定と否定の両義的な可能性を強調する。したがって、親密さを通して労働空間を知るということは、デジタルワークプレイスの出現する適切な関係の中で、「仕事に在る」ことがどのような感覚なのかに細心の注意を払うことを意味する。第一に、親密さは現代のフェミニスト思想における、仕事に対するより広い意味での両義性の中に位置づけられる。その一端は、女性にとっての「平等」な働き方という約束が、ジェンダー化された仕事というアイデンティティを超えた過剰な生活に直面したときに、実現されなかったり、不十分であったりするという、承認の政治の矛盾に起因している。私は、「労働倫理」と「家族の価値」を両立させようとするのではなく、ウィークス（2011）の「ポストワークの想像力」がいかに反本質主義の動きを土台にして、デジタルワークの広範な特性に適した政治を提案しているかを説明する。第二に、ジェンダー化されたアイデンティティのカテゴリーではなく、「性的差異」についてのフェミニストの理解が、仕事を通じての認識の両義性に対応するために、いかに反規範主義的な動きを土台にしているかを示す。身体性という不安定な「物質」を強調することで、このような「性的差異理論」（Grosz, 2005など）は、機械との作業関係における作り手と作り手のカテゴリーの複雑さを説明し、自己の定量化と資格付与の両方としてのデジタルワークの強度の理解を必要とする。第三に、このようなデジタルワークの体験が、親密さ（Berlant, 1998）の空間的感覚を通してどのように起こるかを概説する。デジタルワークプレイスの親密さは、作業空間が破壊的で移動可能であるとき、職場に在ることがどのように感じられるかを通して生じる。

1 ポストワークの場

家庭、職場、市場、公共の場、身体そのもの、これらすべてが、女性や他の人々にとって大きな結果をもたらす、ほぼ無限の多形的な方法で分散し、相互作用しうる。（ハラウェイ、1991：163）

親密なものがデジタル・ワークの重要な場所となる可能性を理解するには、形式的な「職場」を超えた仕事の広がり注目する必要がある。これは、「仕事」が「生活」の一部であると同時に「生活」から切り離されたものであるという延長線上に政治が構築されるという、反本質主義的なフェミニズムの動きを基礎としている。ここでは、「労働の概念を賃労働の形態を越えて拡大するというフェミニストの主張」（Weeks, 2011: 122）が、デジタル・ワークの広範な特性に適したフレームをどのように提供するかを考察する。これは、労働が時間に対する要求であると同時に、時間に対する要求でもあるという矛盾した可能性を認めることを意味する。ウィークス（2011）が「ポストワーク」イマジナリーと呼ぶように、「仕事の時間」はそれ自体、欲望、願望、欲求のための空間として要求される。仕事について単調、ルーティン、束縛的と理解されるかもしれないものすべてに、代替的な可能性が存在し、現在の労働の理想と現実を批判的に精査することで照らし出すことができる。このポスト・ワークの批評プロジェクトは、「私たちに与えられている既存の仕事の世界を拒否し、また代替案を要求する」（2011: 233）肯定的なものである。つまり、仕事に対する、そして仕事を通しての要求は、「自由の可能性の発動として理解される。というのも、「仕事」がいつでもどこでも発生するのであれば、家庭と仕事の価値という（しばしば競合する）言説に包摂されることのない（フェミニストの）政治性を生み出す機会が生まれるからである。

形式的な「職場」を超えて「仕事」を拡張するこのような「ポストワーク」の状態は、デジタル・テクノロジーとの関連において、（少なくとも）2つの方法で理解することができる。

デジタル・テクノロジーとの関連において、（少なくとも）2つの方法で理解することができる。ひとつは、「自動化」の最新の波としてデジタル技術がもたらすのではないかと心配する人もいる「デスクリング」と失業の中に機会を見出すことである。オートメーションは、雇用喪失の原因というよりも、完全失業に対する要求の根拠となり、したがって、時間的な意味において明らかに「ポストワーク」な状況となる。Srnicek and Williams (2015)によれば、これはある種のユニバーサル・ベーシック・インカム³によって実現されるものであり、当然のことかもしれないが、「仕事」そのものがなくなることを意味するのではなく、むしろ「仕事」の内容に基づいて「仕事」が再評価されることになる。退屈で魅力のない仕事は報酬を上げなければならないが、人々がやりたがる魅力的な仕事は報酬を下げる必要がある。デジタル技術を通じたもうひとつの「ポスト・ワーク」表現は、おそらくもっと微妙なものだろう。デジタル技術は、完全な失業を求めるのではなく、労働時間をより創造的なものにする可能性を開く。スマート・マシン」による「仕事の知的内容の増大」（Zuboff, 1988: 243）の可能性は、組織内の労働者の「責任ある自律性」（Friedman, 1977）を超えた分散型の意思決定を可能にする。その代わりに、起業の「起業家的」慣行（Cockayne, 2015）や、小規模なデジタル（「アディティブ」）製造技術（Richardson, 2016; Rosner and Turner, 2015）を活用する「メーカー文化」の広範な非公式性（Birchneil and Urry, 2013a, 2013b）に半制度化された愛着を通じて、仕事は独立して発生する。ここでは、デジタルは、まだ決して普遍的に利用可能ではないものの、望ましい創造的な仕事の民主化を可能にすると考えられている。このように、「ポストワーク」の想像の要素は突飛かもしれないが、このユートピア主義は意図的なものである。ウィークスのフェミニズム政治学にとって、その目的は、既存の労働時間の分類の制約を超えて、人々が「家族の形態、機能、分業の支配的な理想に代わるものを想像し、探求すること」を可能にすることである（Weeks, 2011: 170）。これは、フェミニスト

ウィークス（2011: 184）によれば、これは1970年代から衰退し、より限定的な認識の政治へと道を譲ったユートピアニズムの形態を取り戻そうとするものである：

私たちが知っているようなジェンダーを超えようとする熱望は、現在私たちが生きているより多様なジェンダーの認識と平等な扱いを確保する努力に取って代われ、「家族を粉砕」し、その代替案を模索するプロジェクトは、依然として私物化されたモデルをより包括的なバージョンで実現することを優先し、ほとんど放棄された。ポストワークの過激主義は、家庭と両立して働く平等な権利の擁護に取って代わられた。

これを是正するために、（フェミニストの）ポリテイクス・オブ・ワークは、「私たちの注意とエネルギーを開かれた未来に向ける」（2011: 206）ような、より要求の高いものでなければならない。職場の規則性を超えた仕事に対するユートピア的な要求は、より広範な現実へと転化するかもしれない、異なる意味で望ましい働き方の遊び心に満ちた即興と実行を養うことができる。デジタル・テクノロジーが可能にするこのようなポストワークの可能性では、自分の時間と所有する時間、個人的な時間と職業的な時間の区別は必然的に曖昧になる。つまり、デジタル技術によって仕事が「職場」を拡張する創造的で生き生きとした実践となりうるのであれば、このような仕事の地理が「親密な」ものとなる可能性を見ることができる。ポストワークのイマジナリーは、デジタルワークの広範な特性の両義的な枠組みを提供し、潜在的に「仕事」の時間が増える一方で、より望ましい活動を意味するかもしれない。

2 仕事の中の身体と機械

ハイテク文化によって媒介される統一性の崩壊に対するアンビバレンスは、意識をカテゴリーに分類すること [...] ではなく、ゲームのルールを変える深刻な可能性を秘めた新たな快楽、経験、力を微妙に理解することを必要とする。（ハラウェイ、1991: 172-3）。

仕事」の場所を「生活」へと拡張するだけでなく、デジタルの親密なジオグラフィーは、個人の労働経験をも強化する。これは、仕事が分類される（そして「表現」される）方法と、さまざまに身体化された労働体験とを結びつける反規範的なフェミニズムの動きを取り上げるものである。デジタル技術を通した、身体に関する仕事と仕事における身体とのこうした関係において、「女性の仕事」というカテゴリーは両義的な位置を占めている。技術の進歩は、マルクスとエンゲルス（1967: 88）が仮定したように、男性労働と女性労働の区分を消し去る：近代産業が発展すればするほど、男性の労働は女性の労働に取って代わられる。近代産業が発展すればするほど、男性の労働は女性の労働に取って代わられる。年齢や性別の違いは、労働者階級にとってもはや特別な妥当性を持たない。

しかし同様に、デジタル技術は仕事の自己組織化の可能性を開くことで、柔軟で関係的な実践、つまり女性の規範的な働き方としばしば関連する「ソフトな支配」（Turkle, 1997: 56）の形態である交渉や妥協を促す。Turkle(1997)は、このようなテクノロジーを使いこなす「ソフトな」スキルは男女どちらにも特有のものではないが、それにもかかわらず「多くの女性が惹かれる」スタイルであると論じている。デジタル・テクノロジーに関連した「女性の仕事」というカテゴリーがこのような両義性を持っていることを考えると、デジタル・ワークの経験は「性的差異」の強さを通して理解されるかもしれない。仕事の経験を先験的に「男性」や「女性」として枠にはめるのではなく、「性的差異」の概念を前景化することは、仕事のプロセスがいかにも不確定で探索的であり、しばしばジェンダー化された（そして／または働く）アイデンティティの感覚をトランス形成するかに焦点を当てることを意味する。この理解では、ジェンダー・アイデンティティは、バトラーのパフォーマティビティのモデルに似て、働く経験の原因ではなく結果である。

しかし、ジェンダーの生産に関するバトラーの理論化とは対照的に、性差理論は「物質」の生物学的および／または非男性の構成を強調する。

新物質主義」フェミニズムと呼ばれるものの特徴である（Barad, 2003; Colls, 2012; Hird, 2009; Fannin et al., 2014; Jagger, 2015; Kirby and Wilson, 2011参照）。大まかに言えば、物質性に関するバトラーの説明は「文化／言説」を強調しすぎており、それゆえジェンダーを十分に動揺させていないという主張である。

労働体験におけるテクノロジーの役割を前景化することで、デジタルワークは、労働者がいかに創造者であり、また機械との関係を通じて創造されるかを拡大する。音楽制作や写真撮影のような「芸術的」作業の形態では、（デジタル）テクノロジーは、世界の中で観察する主体の「鏡」として機能し、模倣的な能力で機能すると考えられる。あまり「創造的」ではない仕事では、（デジタル）テクノロジーは、しばしば「ウェアラブル」やその他の自己追跡装置によって強化された観察と数値化のプロセスを通じて、労働者を客観化する（Moore and Robinson, 2015）。つまり、このような人間と非人間との関係においては、作り手と作られるものとの間の差異が不確実なものとなり、「人々が経験していることは透明には明確ではない」（Haraway, 1991: 173）ことを意味する。潜在的なコントロールの道具であると同時に、作業技術の「魅惑的」で「ロマンティックな自動マチズム」（Sussman, 1999; Turner, 2008）は、ワーカーとの「緊密で、感覚的で、関係的な」（Turkle, 1997: 62）関わりをもたらす。したがって、デジタルワークは、「主体と客体という単純なモデル」（Crang, 1997: 366）を複雑化させ、ワーカーとテクノロジーとの共同構成的な経験に注意深く注意を払う必要がある。

セクシュアル・ディファレンスは、カテゴライズを超えたプロセスに焦点を当てることで、労働経験の強度に対する質的なアプローチを強調し、労働者とテクノロジーの関係を通じて、労働者の主観性を開かれたものにする。

このような労働者とテクノロジーの関係を通して、労働者の主体性は開かれたものとなる。Grosz (2005: 160)は次のように論じている：

性の差異とは、例えば男性と女性といった、与えられた、識別可能な、異なる2つのものの間の測定可能な差異ではなく、生産可能なプロセスであり、生産されたものではなく、生産過程にあるものである。

この説明に登場する、性別のある、そして／または働く身体の暫定的な性質は、デジタル技術にふさわしい、客観的なものと主観的なものを組み合わせた「インテンシヴ」な作業空間の理解を必要とする。インテンシヴであること、つまりタスクが時空間的に密集していることと同様に、デジタルワークもまたインテンシヴである。デジタルの労働空間は、大量の仕事を通じて客観的には集中的であり、その仕事の多様な経験を通じて主観的には集中的である。このことは、デジタルワークにおける「定量化」がどのように理解されるかに影響を与える。一見容赦のない「通知」を通じて、具現化されたスキルをパッケージ化し、監視し、指示することができる（ウェアラブルな）ツールが普及する一方で、そのような仕事には「予測不可能で予見できない」（Grosz, 2005: 189）要素も残っている。Swan (2013)が論じているように、「数値化された自己」もまた、客観的なデータの測定基準と、このデータの影響に関する主観的な経験を組み合わせた定性的なものである。このような定量化は、ワーカーが自分の環境を感じ取り、異なる解釈をし、作業タスクの組み入れを調整することで、自己の質的变化と絡み合っている。そのため、より多くのタスクを生み出し、それがどのように行われるかのバリエーションを通じてさらに増殖することで、デジタルワークの強度に関する説明は、定量化のプロセスとの相互作用の中で、質的な「差異の探求」（Grosz, 2005: 190）を保持しなければならない。次に、これらの作業体験を通して展開される親密さの空間的感觉に目を向ける。

3 作業空間を感じる

サイボーグには全体的な物語を生み出そうという衝動はないが、境界、その構築と解体の親密な体験がある」（Haraway, 1991: 181）。(ハラウェイ、1991: 181)

個人的であると同時に職業的であり、私的であると同時に公的であるように、デジタル・テクノロジーを使って「仕事をする」ことのこうした親密さは、「ハイテク世界で体験されることが何を意味するのか」（Haraway, 1991: 173）を強調する空間の「効果的な理論を共同で構築する」アプローチを必要とする。私はここで、このようなデジタルの親密なジオグラフィが、仕事に感じることを通してどのように発生するかを概説する。デジタル・テクノロジーは、「職場にいる」とことと「仕事をしている」とことの間の潜在的な矛盾を誇張する。つまり、作業空間は「客観的な」固定された作業場所と、行われている作業の「主観的な」感覚の組み合わせによって構成される。この「作業空間」を「親密」と呼ぶことは、デジタルテクノロジーと共に、またデジタルテクノロジーを通して仕事をする経験を構成する、近接と距離、接続と切断の両義的な感情を強調することである。Gregg (2011: 1) は、「個人的アイデンティティと職業的アイデンティティの間の確固とした境界がもはや適用されない」ときに、デジタルテクノロジーが利用可能性の慣習に挑戦するという「プレゼンス・ブリード」という概念を通して、「仕事の親密さ」のこのような不確かな結びつきについて論じている。このようなデジタル・ワークにおいて、彼女はどのようなものがあるかを示している：

つながり、コミュニティ、連帯の機会があり、友情という概念が意味するものを複雑にする関係が生まれる。しかし同時に、テクノロジーは、不安定な雇用環境と直線的なキャリアパスの終焉に直面する労働者たちの不安定感、脅威、恐怖を煽っている。(2011: 8)

ここで「親密さ」とは、正規の職場を超えた場所であると同時に、テクノロジーと結びついた労働体験のスタイルでもある。親密さとは、多かれ少なかれ固定された空間の対象であり

空間的な対象であり、個人的な役割が交渉され、再構成される領域である。同様に、「親密さ」は、テクノロジーとの／テクノロジーを通じての、自己を超えた愛着の形成を通して起こる主観的な仕事のプロセスを構成する。

そして、親密さの地理学⁽⁶⁾は、デジタル・ワークの両義性を理解するために、この「主体的対象」(Suchman, 2011)、つまり、断絶的で移動可能な作業空間のパラメータをたどり、その動きを追うことができるだろう。このことを通して考えると、最初の一步は、親密圏の断絶から、デジタルの作業空間がいかに境界のない、固定された場所でないかを考えることである。親密圏に対するフェミニスト的なアプローチは、定量的に近しいという感覚を揺るがすような、外部からの浸透の形態によって構成されることを強調する。親密さという近さは、距離に対する爆発的な感情や「耐え難い」強制力を伴うことがある(Berlant and Edelman, 2014)。このように、親密な領域を「中で」占め、占められようとすることは、例えば規制や搾取の経験を伴うかもしれない、デジタルテクノロジーを介した共有作業空間の複雑な感覚を通して起こる。生政治的なプロジェクト(Oswin and Olund, 2010)として、親密圏は働く主体を形成するために管理される。例えば、「職場」内外で体现されたタスクのパフォーマンスを最適化しようとする上述のウェアラブル・テクノロジーなどを通じて。商業的なプロジェクトとして(Boris and Mas, 2010)、親密な領域は搾取され、例えばAirBnBのホストが要求する家事やホスピタリティの遂行を通じて、本物の(働く)主体を弱体化させる(Molz, 2012)。このような場合、デジタル技術によって親密な領域の境界が破壊されることで、働く空間が感じられる。

第二のステップでは、親密さの動きを検証し、ワーキングスペースがどのようにデジタルワークへの、そしてデジタルワークを通しての継続的なつながりの感情を(再)構成するかを理解する。つながる

仕事とのつながり-「親密な」関係や繰り返される「出会い」を通じて構築される仕事活動に関する知識-は、デジタルワークの創発的な特性を通じて可動性を帯びる。デジタル技術を通じた仕事への愛着や仕事との出会いは、カフェや寝室、公園など、他の場所を身近にする実践と混ざり合いながら、移動する仕事とのつながりを構成する。このような移動可能な仕事との結びつきは、不定形で拡散する存在感を持ち、作業空間は「安定させる何か、制度的な何か」(Berlant, 1998: 287)につながることを回避する暫定的な側面を持つ。つまり、作業空間はより広い環境を形作り、それによって形作られるのである。親密さは固定されたパラメータをとらず、固まることもなく、その代わりに「具体的な空間とは無縁のポータブル」であり、実際には「その周囲に空間を作り出すドライブ」なのである(Berlant, 1998: 284)。デジタル・テクノロジーを介した仕事との、この感動的で包み込むような親密さは、「愛着の美学」を通して感じられるかもしれないが、「必然的な形や感情」(1998: 285)はない。

デジタル作業空間の破壊的で移動的な親密さは、ともに圧倒的であると同時に望ましいものであり(Berlant, 2016)、作業しているときの感覚に細心の注意を払う必要がある。テクノロジーによって仕事に束縛されることは、同時に働く自由への愛着でもある。これらのデジタルツールは、仕事を超えて自己にとってより良い労働活動やつながりの形態をもたらすという約束でもある。この親密な地理学は、束縛を破壊するだけでなく、方向づけと見当違いの過程(Ahmed, 2006)を含み、これらの拡張と強化を通じて、仕事は何になるのか、何が仕事になるのかを「感じ取る」(Berlant, 2011: 17)。ソーシャル・メディアは、このような親密な方向づけを通じて作動し、個人的な「スタタス」や「フィード」は、生産と消費の形態であり、同時に仕事を方向づけることができる。

個人的な「スタウス」や「フィード」は生産と消費の形態であり、（例えば自己宣伝や「ネットワーキング」を通して）仕事を方向づけると同時に、（例えば「スクロール」することで相互作用のレジスターが変化することで）仕事の活動を迷わせることもある。テクノロジーとの具体化された関わりを通して、更新や通知を融合させるこのような愛着において、インティ・マシーは仕事共有される場所であり、仕事を通して共有が行われる場所でもある。つまり、デジタルの親密なジオグラフィーは、ワーク／ライフ・インタラクションの破壊的な「圏」に焦点を当てるだけでなく、例えばコワーキング・スペース⁷⁾に見られるような、モバイルな準制度的空間形態を強調するものでもある。そして、デジタル・テクノロジーを使って働くこと、またデジタル・テクノロジーを通して働くことは、充実感や搾取、あるいはその両方の経験を同時に生み出すかもしれない、仕事の場の親密さを通して起こる。

V 結論

フェミニズム批評は、仕事をデジタル地理学の経験的焦点として位置づけるための分析手段を提供する。地理学者は、デジタル技術を通じて、またデジタル技術とともに、どのような労働活動が行われるかを検討することで、デジタル経済に関する議論に貢献することができる。これらのテクノロジーは仕事を拡張し、強化し、職場の境界を出現させる。これは仕事の両義性を高め、働く経験が肯定や否定となる可能性を高める。反本質主義的、反規範主義的なポリティクスを土台に、デジタル技術による仕事の拡張と強化にアプローチするフェミニズム思想の有用性が、インティメイシーというレンズを通して示されてきた。ワークスペースがいつ、どのような意味合いでワークプレイスになるのか、あるいはオープンなつながりがルールに支配されたネットワークになるのか、その不確かさを考えるには、仕事をしていることがどのような感覚なのかに焦点を当てる必要がある。このようなデジタルの親密な地理に関する知識は、理論や実践を組み合わせることで、ワークプレイスに関する記述を生み出し、それ自体が文化的に創造的な行為となる可能性がある。

文化的に創造的な行為となり、「社会的実践のための場を開くために、社会的実践を先取りする」（De Certeau, 1984: 125）。私は、親密さを通じて「デジタル・ワークプレイス」を知り、変えるというこのプロジェクトを継続するために、3つの領域を指摘する。

第一に、「ポストワーク」の場は、職場と労働者の関係を理解するためにさらなる検証が必要である。フレキシブルであろうと「不安定」であろうと、デジタルワークプレイスとワーカーは微妙な擬態の関係にある。模倣の複雑な適応機能は、茶化し、カモフラージュ、威嚇といった相反する効果を生み出し（Lacan, 1979: 99）、労働者のための／労働者のための職場のレプレゼンテーションが、デジタルテクノロジーによってどのような意味を持つのかに焦点を当てる必要がある。ワークプレイスの流動性と、そこを占める様々な志向のワーカーの混在は、例えばワークライフバランス政策を通じて、仕事の量と強度を規制し管理しようとする既存の試みを弱体化させる。拡大するデジタルワークプレイスが労働者に与える影響を検証することは、所得水準の異なる末端における労働条件や労働者のウェルビーイングに関する議論に貢献するだろう。同様に、「生産性」の尺度とその調査に関心のある人々にとっては、ポストワークの場を通じて行われる仕事の質と量に影響があると思われる。

第二に、デジタル技術を通じて、身体と機械のさまざまな組み合わせが「仕事」に蔓延していることから、進化する労働者の身体形態についてより深く理解する必要がある。人々は様々な強度のテクノロジーとの相互作用、監督、指示を受けている。機械を介した仕事とこのような曖昧な相互関係や、仕事は遠くに消えていくことの意味合い（Suchman, 1995）は、技能の理解に関する問題を提起している。技能が仕事をする活動の一部であるとすれば、デジタル技術は機械と密接に結びついた身体的な精巧さをもたらす。

それは、過去の「技能」を制限したり、置き換えたりする一方で、仕事の情報的内容を増殖させるかもしれない（Berardi, 2009）。このことは、機械と人間の労働に対する理解を「機械的に自動化されたものから電子的に自律したもの」（Stacey and Suchman, 2012: 28）へとシフトさせ、おそらくは雇用の喪失をもたらすだけでなく、新たな労働スタイルをも生み出す。このようなデジタルワークによる近接の経験において、何がスキルを構成するのか、また、労働者はどのようにそのような労働環境のために訓練し、即興的に対応するのか、という問題は、地理学的な調査が必要な領域である。

第三に、「仕事空間を感じる」という考え方と実践は、政治に関わるさらなる問題を切り開く。デジタルの仕事から感じ取れる内在的なものは、異なる働き方をする機会を提供するが、同時に問題でもある。起業や「自営業」が拡大するにつれて、雇用は曖昧なカテゴリーとなり、「失業という古い言葉」は「その言葉が長い間名付けてきた場面では」もはや認識できない（Derrida, 1994: 101）。それゆえ、デジタル・テクノロジーは、仕事をしているという感覚と社会における所得の分配との間の不一致を誇張するかもしれない。それゆえ、「デジタル・タル・ワークプレイス」の出現する特性をより深く理解することは、現代と未来の仕事と収入の関係に挑戦する政治を模索する人々にとって不可欠であるように思われる。

謝辞

編集者と査読者の方々の丁寧なコメントによって、論旨と貢献を明確にしようとする私の試み（まだ失敗することもあるが）に非常に役立った。また、初期の草稿に貴重なフィードバックをくださったTara Cookson, Sarah Radcliffe, Carmen Teeple Hopkinsにも感謝する。ダニエル・コケインには、批評的でありながら、いくつかの混乱した初期の考えを寛大に読み解いてもらい、大変感謝している。また、デイヴィッド・ピッセルには、未来環境のためのスキルに関する現在未発表の論文を教えてもらった。

注釈

1. デジタル・ワーク」を構成する可能性のあるさまざまな実践は、世界的に非常にばらつきがある。
2. 私が強調したいのは、「フェミニズム」とは、「女性」の経験を越えて広がっているが、そこから生じている（ひいてはそれを形成している）政治思想の一形態であるということである。このことは、何を「女性らしさ」、ひいては「女性の仕事」とみなすかは議論の余地があることを示している。それにもかかわらず、地理学者たちによる、例えば賃金における「女性」の職場における継続的な不平等を浮き彫りにする素晴らしい価値のある研究がある（例えば、Larner, 1991; Molloy and Larner, 2010; Cox, 1997; 2007; Reimer, 2016; Epstein and Kalleberg, 2004）。
3. Kalleberg, 2004）。
4. 他の用語も使われるが、原則は、労働が社会における所得分配の主要なメカニズムを形成していないということである。例えば、ハルトとネグリ（2009: 380）の「生産的で尊厳のある存在の必需品に十分なベーシック・インカム」の呼びかけや、南部アフリカの社会福祉プログラムとの関連における（生産とは対照的な）分配の政治学に関するフェルグソン（2015）の議論を参照されたい。
5. こうした議論についての洞察は、フェミニズムが「反生物学的」であるという「新物質主義者」の主張についてのAhmed（2008）の議論を参照されたい。彼女は、「新物質論」的な学問は「物質」を「フェティッシュな対象」にしてしまう危険性があると（堂々と挑発的な態度で）主張している。その代わりに彼女は、少なくとも部分的にはこうした理論的な「対象」を手放し、（理論的な）物事がばらばらになったときに何が起るかを探る必要性があることを示唆している。
6. この「新しい」フェミニストの学問の旗印の下にある「唯物論」の間には、哲学的に重要な不一致があることを指摘し、例えば、パラッドの物質のパフォーマティヴィティの超越性に対して、ドゥルーズにおける内在性（グロッシュのヴィタリスト的アプローチで取り上げられている）を論じたHein（2016）の考察を参照されたい。
7. このような親密さの複雑性は、人種やセクシュアリティなどの身体化された経験が単独で繰り広げられつつも、より広範な社会の「集合体」や、そのような「文化的」線に沿って切り取られた不平等と結びついている出会いをつなげようとする地理学者たちの関心を集めてきた（Nayak, 2011; Saldanha, 2010; Valentine, 2008など）。この「親密な転回」は、地政学的な方向転換（Pain, 2015）を含め、「政治的主題としてカウントされるものの境界における潜在的なシフト」（Price, 2013: 578）を浮き彫りにする、複雑な「近接性の政治学」を含んでいる。

7. これらのスペースのロンドンの例については、GLAの2014年の報告書「Supporting Places of Work: Incubators, Accelerators and Co-working Spaces」を参照のこと。

利益相反の宣言

著者は、本論文の研究、執筆、および／または出版に関して、潜在的な利益相反がないことを宣言した。

資金提供

本論文の研究、執筆、出版に関して、筆者はいかなる財政的支援も受けていない。

参考文献

- Ahmed S (2004) *The Cultural Politics of Emotion*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Ahmed S (2006) *Queer Phenomenology: Orientations, Objects, Others*. Durham: Duke University Press.
- Ahmed S (2008) Open Forum 想像上の禁止事項: 新物質主義」の創始的
身振りについての予備的考察. *European Journal of Women's Studies* 15: 23-39.
- Ash J (2013) Rethinking affective atmospheres: テクノロジー、振動、そして非人間の空間時間. *Geoforum* 49: 20-28.
- Avery G and Baker E (2002) Reframing the infomated household-workplace. *Information and Organization* 12: 109-134.
- Bakker I (2007) Social reproduction and the constitution of a gendered political economy. *New Political Economy* 12: 541-556.
- Banks J and Deuze M (2009) Co-creative labour. *International Journal of Cultural Studies* 12: 419-431.
- Barad K (2003) Posthumanist performativity: 物質がいかにして物質になるかの理解に向けて. *Signs* 28: 801-831.
- Bauer RM and Gegenhuber T (2015) Crowdsourcing: Global balance and the twisted roles of consumers and producers. *Organization* 22: 661-681.
- Beck U (2000) *The Brave New World of Work*. ケンブリッジ: Polity Press.
- Berardi F (2009) *The Soul at Work: From Alienation to Autonomy*. ロサンゼルス: Semiotext(e).
- Bergvall-Kareborn B and Howcroft D (2014) Amazon Mechanical Turk and the commodification of labor. *New Technology, Work and Employment* 29: 213-223.

- Berlant L (1998) Intimacy: 特集号. *Critical Inquiry* 24: 281-288.
- Berlant L (2011) *Cruel Optimism*. Durham: Duke University Press.
- Berlant L (2016) The Commons: Infrastructures for troubling times. *Environment and Planning D: Society and Space* 34: 393-419.
- Berlant L and Edelman L (2014) *Sex, or the Unbearable*. Durham: Duke University Press.
- Beverungen A, Bohm S and Land C (2015) Free labour, social media, management: マルクス主義的組織研究への挑戦. *Organization Studies* 36: 473-489.
- Birchneil T and Urry J (2013a) 3D, SF and the future. *Futures* 50: 25-34.
- Birchneil T and Urry J (2013b) Fabricating Futures and the Movement of Objects. *Mobilities* 8: 388-405.
- Boris E and Parrenas R (eds) (2010) *Intimate Labors: Cultures, Technologies, and the Politics of Care*. Stanford: Stanford University Press.
- Boyer K, Reimer S and Irvine L (2013) The nursery work-space, emotional labour and contested understanding of commoditised childcare in the contemporary UK. *Social & Cultural Geography* 14: 517-540.
- Burchell B (2006) Work Intensification in the UK. In: Perrons D, Fagan C, McDowell L, Ray K and Ward K (eds) *Gender Divisions and Working Time in the New Economy: 英国におけるジェンダー分断と労働時間: ヨーロッパと北米における仕事、ケア、公共政策の変化*. Northampton, MA: Edward Elgar, 21-34.
- Butler J (1991) Imitation and gender subordination. In: Fuss D (ed.) *Inside/Out: Lesbian Theories, Gay Theories*. New York: Routledge, 13-30.
- Butler J (1993) *Bodies that Matter*. ロンドン: Routledge.
- Butler J. (2004) Performative acts and gender constitution: 現象学とフェミニズム理論のエッセイ. In: Bial H (ed.) *The Performance Studies Reader*. London: Routledge.
- Cameron J and Gibson-Graham JK (2003) Feminising the economy: メタファ、戦略、政治. *Gender, Place & Culture* 10: 145-157.
- Cockayne D (2015) Entrepreneurial affect: San Francisco's digital media sector. *Environment and Planning D: Society and Space*. doi: 10.1177/0263775815618399.
- Coe NM (2013) Geographies of production III: Making space for labor. *Progress in Human Geography* 37: 271-284.

- Coe NM and Jordhus-Lier D (2011) Constrained agency?労働の地理学を再評価する。 *Progress in Human Geography* 35: 211-233.
- Cohen R (2010) Rethinking 'mobile work': 移動美容師の労働生活における空間、時間、社会的関係の境界。 *Work, Employment & Society* 24: 65-84.
- Colls R (2012) Feminism, bodily difference and non-representational geographies: Feminism, bodily difference and non-representational geographies. *Transactions of the Institute of British Geographers* 37: 430-445.
- Cova B and Dall'i D (2009) Working Consumers: マーケティング理論の次のステップ? *Marketing Theory* 9: 315-339.
- Cox R (1997) Invisible labour: ロンドンにおける有給労働の認識。 *Journal of Occupational Science* 4: 62-67.
- Cox R (2007) オーペアの身体: 性の対象、姉妹、それとも学生? *European Journal of Women's Studies* 14: 281-296.
- Crang M (1997) Picturing practices: 観光客の視線を通じた研究。 *Progress in Human Geography* 21: 359-373.
- Crang M, Crosbie T and Graham S (2006) Variable geo-metries of connection: 都市のデジタルデバイドと情報技術の利用。 *Urban Studies* 43: 2551-2570.
- Cresswell T (2011) Mobilities I: キャッチアップ。 *Progress in Human Geography* 35: 550-558.
- Dalla Costa M and James S (eds) (1972) *The Power of Women and the Subversion of the Community*. プリントル: Falling Wall Press.
- De Certeau M (1984) *The Practice of Everyday Life*. Berkeley: University of California Press.
- Del Casino VJ (2015) Social geographies II: Robots. *Progress in Human Geography*. doi: 10.1177/0309132515618807.
- De Peuter G (2011) Creative economy and labor precarity: A contested convergence. *Journal of Communication Inquiry* 35: 417-425.
- Derrida J (1994) *Spectres of Marx*. London: Routledge. Donzelot J (1991) 仕事における快楽。 In: Burchell G, Gorrer J (eds) *フーコー効果シカゴ*: University of Chicago Press, 251-280.
- Dyer S, McDowell L and Batnitzky A (2008) Emotional labour/body work: 英国の国民保健サービスにおける移民の介護労働。 *Geoforum* 39: 2030-2038.
- Elwood S and Leszczynski A (2011) Privacy, reconsidered: 新たな表現、データ実践、そしてジオ・ウェブ。 *Geoforum* 42: 6-15.
- Epstein C and Kalleberg A (2004) *Fighting for Time: Shifting Boundaries of Work and Social Life*. ニューヨーク: Russell Sage Foundation.
- Ettlinger N (2014) The openness paradigm. *New Left Review* 89: 89-100.
- Fannin M, MacLeavy J, Larner W and Wang W (2014) Work, life, bodies: 新物質論とフェミニズム。 *Feminist Theory* 15: 261-268.
- Felstead A, Jewson N and Walters S (2005) *Changing Places of Work*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Ferguson J (2015) *Give a Mana Fish: Reflections on the New Politics of Distribution*. Durham: Duke University Press. Flisfeder M (2015) The entrepreneurial subject and the objectivization of the self in social media. *Southern Atlantic Quarterly* 114: 553-570.
- Friedman A (1977) *Industry and Labour*. Basingstoke: Macmillan.
- Fuchs C (2014) Digital prosumption labor on social media in the context of the capitalist regime of time. *Time & Society* 23: 97-123.
- Gabriel Y, Korczynski M and Rieder K (2015) Organizations and their consumers: Bridging work and consumption. *Organization* 22: 629-643.
- Gibson-Graham JK (1996) *The End of Capitalism (As We Knew It): A Feminist Critique of Political Economy*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Gibson-Graham JK (2006) *A Postcapitalist Politics*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Gibson-Graham JK (2008) Diverse economies: 多様な経済: 「別の世界」のための実行的実践。 *Progress in Human Geography* 32: 613-632.
- GLA (Greater London Authority) (2014) *Supporting places of work: インキュベーター、アクセラレーター、共同作業スペース*. http://www.london.gov.uk/sites/default/files/supporting_places_of_work_-_iacs.pdf (accessed 18 October 2016).
- Graeber D (2015) *The Utopia of Rules: On Technology, Stupidity, and the Secret Joys of Bureaucracy*. London: Melville House.
- Graham M (2011) Time machines and virtual portals: デジタル・デバイドの空間性。 *Progress in Development Studies* 11: 211-227.
- Graham M, Hale S and Stephens M (2012) Featured graphic: デジタル・デバイド: インターネットアクセスの地理学。 *Environment and Planning A* 44: 1009-1010.

- Greenhill A and Wilson M (2006) Haven or hell?電子社会におけるテレワーク、フレキシビリティ、家族：マルクス主義的分析。 *European Journal of Information Systems* 15: 379-388.
- Gregg M (2009) Banal Bohemia: 象牙の塔のホットデスクからのブログ。 *Convergence: The International Journal of Research into New Media Technologies* 15: 470-483.
- Gregg M (2011) *Work's Intimacy*.ケンブリッジ: Polity.
- Grosz E (2005) *Time Travels: Feminism, Nature, Power*. Durham: Duke University Press.
- Hannam K, Sheller M and Urry J (2006) Editorial: Mobilities, immobilities and moorings. *Mobilities* 1: 1-22.
- Haraway D (1991) *Simians, Cyborgs and Women: The Reinvention of Nature*. ニューヨーク: Free Association Books.
- Hardt M (1999) Affective labor. *Boundary 2* 26: 89-100.
- Hardt M and Negri A (2009) *Commonwealth*.ケンブリッジ, MA: Belknap.
- Hassan R (2003) Network time and the new knowledge epoch. *Time & Society* 12: 225-241.
- Hein S (2016) The new materialism in qualitative inquiry: パラッドとドゥルーズの哲学はどの程度相容れるのか? *Cultural Studies Critical Methodologies* 16: 132-140.
- Hird M (2009) Feminist engagements with matter. *Feminist Studies* 35: 329-346.
- Hislop D and Axtell C (2009) To infinity and beyond?ワークスペースと多拠点ワーカー。 *New Technology, Work and Employment* 24: 60-75.
- Hochschild A (1983) *The Managed Heart: The Commercialization of Human Feeling*.Berkeley: カリフォルニア大学出版局。
- Huang S and Yeoh B (2007) Emotional labour and transnational domestic work: Huang S and Yeoh (2007) Emotional labor and transnational domestic work: The moving geographies of 'maid abuse' in Singapore. *Mobilities* 2: 195-217.
- Huws U (2003) *The Making of a Cybertariat: The Making of Cybertariat: Virtual Work in a Real World*.ニューヨーク: Monthly Review Press.
- Jagger G (2015) The new materialism and sexual differences. *Signs* 40: 321-342.
- James A and Vira B (2010) 'Unionising' the new spaces of the new economy?インドのITサービス・ビジネス・プロセス・アウトソーシング産業におけるオルタナティブな労働組織化。 *Geoforum* 41: 364-376.
- Jarrett K (2016) *Feminism, Labour and Digital Media: The Digital Housewife*.London: Routledge.
- Jarvis H and Pratt A (2006) Bringing it all back home: 仕事の拡張と「溢れ」。 *Geoforum* 37: 331-339.
- Johnson L, Andrey J and Shaw S (2007) Mr: Telework and the merging of women's work and home domains in Canada. *Gender, Place & Culture* 14: 141-161.
- Jones A (2008) The rise of global work. *Transactions of the Institute of British Geographers* 33: 12-26.
- Kinsley S (2014) The matter of 'virtual' geographies. *Progress in Human Geography* 38: 364-384.
- Kirby V and Wilson E (2011) Feminist conversations with Vicki Kirby and Elizabeth A. Wilson. *Feminist Theory* 12: 227-234.
- Kirsch S (2014) Cultural geography II: Cultures of nature (and technology). *Progress in Human Geography* 38: 691-702.
- Kitchin R (2013) Big data and human geography: 機会、課題、リスク。 *Dialogues in Human Geography* 3: 262-267.
- Kitchin R (2014a) Big data, new epistemologies and paradigm shifts. *Big Data & Society* 1. doi: 10.1177/2053951714528481.
- Kitchin R (2014b) The real-time city?ビッグデータとスマート・アーバニズム。 *GeoJournal* 79: 1-14.
- Kitchin R and Dodge M (2011) *Code/Space: Software and Everyday Life*.マサチューセッツ州ボストン: MIT Press.
- Kleine D (2013) *Technologies of Choice?ICTs, Development, and the Capabilities Approach*.Boston, MA: MIT Press.
- Kwan M-P (2002) Feminist visualization: Kwan M-P (2002) Feminist visualization: Re-envisioning GIS as a method in feminist geographic research. *Annals of the Association of American Geographers* 92: 645-661.
- Kwan M-P (2007) Affecting Geospatial Technologies: フェミニスト的情動の政治学に向けて。 *The Professional Geographer* 59: 22-34.
- Lacan J (1979) *The Four Fundamental Concepts of Psychoanalysis*.London: Penguin.
- Larner W (1991) Labour migration and female labor: Samoan women in New Zealand. *Journal of Sociology* 27: 19-33.
- Larsen J, Urry J and Axhausen K (2008) Coordinating face-to-face meetings in mobile network societies. *Information, Communication & Society* 11: 640-658.
- Laurier E (2004) Doing Office work on the motorway. *Theory, Culture & Society* 21: 261-277.
- Leszczynski A (2014) Spatial media/tion. *Progress in Human Geography*.doi: 10.1177/0309132514558443.
- Leszczynski A and Elwood S (2015) Feminist geographies of new spatial media: 新しい空間メディアのフェミニスト地理学

- 空間メディア。 *The Canadian Geographer / Le Ge'ographe canadien* 59: 12-28.
- Liu A (2004) *The Laws of Cool: Knowledge Work and the Culture of Information*. シカゴ: University of Chicago Press.
- Manzerolle V (2010) Mobilising the audience commodity: ワイヤレス世界におけるデジタル労働。 *Ephemera: theory and politics in organization* 10: 455-469.
- Marx K and Engels F (1967) *The Communist Manifesto*, trans. Moore S. London: Penguin Books.
- McDowell L (1991) Life without father and Ford: The new gender order of post-Fordism. *Transactions of the Institute of British Geographers* 16: 400-419.
- McDowell L. (1993) 空間、場所、ジェンダー関係: フェミニズム経験論と社会関係の地理学。 *Progress in Human Geography* 17: 157-179.
- McDowell L (1997) *Capital Culture: Gender at Work in the City*. Oxford: Blackwell.
- McDowell L (2015) Poepke Lecture in Economic Geography: 他者の生活: Body work, the production of difference, and labor geographies. *Economic Geography* 91: 1-23.
- McRobbie A (2002) Clubs to companies: スピードアップしたクリエイティブな世界における政治文化の衰退に関するノート。 *Cultural Studies* 16: 516-531.
- Mitchell K, Marston S and Katz C (2003) Life's work: 序論、レビュー、批評。 *Antipode* 35: 415-442.
- Molloy M and Larner W (2010) Who needs cultural intermediaries indeed? デザイナー・ファッション業界におけるジェンダー化されたネットワーク。 *Journal of Cultural Economy* 3: 361-377.
- Molz J (2012) CouchSurfing and network hospitality: 'It's not just about the furniture'. *Hospitality & Society* 1: 215-225.
- Moore P and Robinson A (2015) The quantified self: 新自由主義的職場において何が重要か。ニューメディアと社会。 doi: 10.1177/1461444815604328.
- Mullings B (1999) Sides of the same coin? ジャマイカのデータ入力オペレーターの対処と抵抗。 *Annals of the Association of American Geographers* 89: 290-311.
- Nardi B, Whittaker S and Schwarz H (2002) NetWORKers and their activity in intensional networks. *Computer Supported Cooperative Work* 11: 205-242.
- Nayak A (2011) 地理、人種、感情: 社会と文化の交差点。 *Social & Cultural Geography* 12: 548-562.
- Negri A (1989) *The Politics of Subversion: A Manifesto for the Twenty-First Century*. ケンブリッジ: Polity.
- Neilson B and Rossiter N (2008) Precarity as a political concept, or, Fordism as exception. *Theory, Culture & Society* 25: 51-72.
- Oswin N and Olund E (2010) Governing intimacy. *Environment and Planning D: Society and Space* 28: 60-67.
- Pain R (2015) Intimate war. *Political Geography* 44: 64-73.
- Perrons D, Fagan C, McDowell L, Ray K and Ward K (eds) (2006) *Gender Divisions and Working Time in the New Economy: Changing Patterns of Work, Care and Public Policy in Europe and North America. Policy in Europe and North America*. Northampton, MA: Edward Elgar.
- Pollard J (2013) Gendering capital: Gendering capital: Financial crisis, financialization and (an agenda for) economic geography. *Progress in Human Geography* 37: 403-423.
- Pratt G (2004) *Working Feminism*. Philadelphia: Pratt G. (2004) *Working Feminism*.
- Pratt G (2012) *Families Apart: Migrant Mothers and the Conflicts of Labor and Love*. ミネアポリス: University of Minnesota Press.
- Pratt G and Rosner V (eds) (2012) *The Global and the Intimate: The Global and the Intimate: Feminism in Our Time*. New York: Columbia University Press.
- Price PL (2013) Race and ethnicity II: Skin and other intimacies. *Progress in Human Geography* 37: 578-586.
- Reimer S (2016) 'It's just a very male industry': 英国のデザイン事務所におけるジェンダーと仕事。 *Gender, Place and Culture* 23: 1033-1046.
- Richardson M (2016) Pre-hacked: Open design and the democratisation of product development. *New Media and Society* 18: 653-666.
- Roig A, San Cornelio G, Sanchez-Navarro J and Ardevol E (2014) 'The fruits of my own labor': 新しいメディアランドスケープにおける共同創造性の衝突モデルに関するケーススタディ。 *International Journal of Cultural Studies* 17: 637-653.
- Rose G (1993) *Feminism and Geography: The Limits of Geographical Knowledge*. ケンブリッジ: Polity.
- Rose G. (1997) Situating knowledges: Positionality, reflexivity and other tactics. *Progress in Human Geography* 21: 305-320.
- Rose G (2015) Rethinking the geographies of cultural 'objects' through digital technologies: インターフェイス、ネットワーク、摩擦。 *Progress in Human Geography*. doi: 10.1177/0309132515580493.
- Rosner D and Turner F (2015) Theaters of alternative industry: Hobbyist repair collectives and the legacy

- Theaters of alternative industry: Hobbyist repair collectives and legacy of the 1960s American counterculture. In: Plattner H, Meinel C and Leifer L (eds) *Design Thinking Research*. ニューヨーク: Springer International, 59-69.
- ロス A (2000) 精神労働問題. *Social Text* 63: 1-31.
- Ross A (2008) The new geography of work: 不安定なものに力を? *Theory, Culture & Society* 25: 31-49.
- Saldanha A (2010) 皮膚、感情、集合体: FanonのGuattarianのバリエーション. *Environment and Planning A* 42: 2410-2427.
- Scholz T (ed.) (2013) *Digital Labor: The Internet as Play-ground and Factory*. New York: Routledge.
- Sennett R (1998) *The Corrosion of Character: The Personal Consequences of Work in the New Capitalism*. ニューヨーク: Norton.
- Srnicek N and Williams A (2015) *Inventing the Future: Postcapitalism and a World without Work*. Verso Books. ニューヨーク州ブルックリン。
- Stacey J and Suchman L (2012) Animation and automation: 身体と機械の生氣と労働. *身体と社会* 18: 1-46.
- Steward B (2000) Changing times: The meaning, measurement and use of time in teleworking. *Time & Society* 9: 57-74.
- Suchman L (1995) Making work visible. *Communications of the ACM* 38: 56-64.
- Suchman L (2011) Subject Objects. *Feminist Theory* 12: 119-145.
- Sussman M (1999) Performing the intelligent Machine: オートマトン・チェス・プレイヤーの人生における欺瞞と魅惑. *TDR/The Drama Review* 43: 81-96.
- Swan M (2013) 定量化された自己: ビッグデータ科学と生物学的発見における根本的破壊. *Big Data* 1: 85-99.
- Terranova T (2000) Free labour: デジタル経済のための文化の生産. *Social Text* 2: 33-58.
- Turkle S (1997) *Life on the Screen: インターネット時代のアイデンティティ*. ニューヨーク: Simon & Schuster.
- Turner F (2008) Romantic automatism: 冷戦下のアメリカにおけるアート、テクノロジー、共同労働. *Journal of Visual Culture* 7: 5-26.
- Valentine G (2008) Living with Difference: 出会いの地理学についての考察. *Progress in Human Geography* 32: 323-337.
- Vartiainen M and Hyrkkanen U (2010) Changing requirements and mental workload factors in mobile multi-location work. *New Technology, Work and Employment* 25: 117-135.
- Vilhelmson B and Thulin E (2001) 定常的な場所での仕事は消えつつあるのか? スウェーデンにおけるICTを利用した仕事と移動を基本とする仕事の発展. *Environment and Planning A* 33: 1015-1029.
- Wainwright E (2010) The office is always on: DEGW、ルフェーヴル、そしてワイヤレス都市. *The Journal of Architecture* 15: 209-218.
- The Problem with Work: Feminism, Marxism, Antiwork Politics, and Postwork Imaginaries*. Durham: Duke University Press.
- Wills J (2009) Subcontracted employment and its challenge to labor. *Labor Studies Journal* 34: 441-60.
- Wilson A (2016) The infrastructure of intimacy. *Signs* 41: 247-280.
- Wilson M (2011) Data matter(s): Legitimacy, coding, and qualifications-of-life. *Environment and Planning D: 社会と空間* 29: 857-872.
- ウィルソン・M (2012) 位置情報サービス、目立つモビリティ、そして位置を意識した未来. *Geoforum* 43: 1266-1275.
- Wilson M (2014) Continuous connectivity, handheld computers, and mobile spatial knowledge. *Environment and Planning D: Society and Space* 32: 535-555.
- Witthof N (1994) Autonomist Marxism and the information society. *Capital & Class* 18: 85-125.
- Wright MW (1997) Crossing the factory frontier: メキシコのマキラドールにおけるジェンダー、場所、権力. *Antipode* 29: 278-302.
- Wright MW (2009) Gender and geography: グローバルと密接に関わる知識とアクティヴィズム. *Progress in Human Geography* 33: 379-386.
- ライト MW (2010) ジェンダーと地理学II: ギャップを埋める-フェミニスト、クィア、そして地理的想像力. *Progress in Human Geography* 34: 56-66.
- Zuboff S (1988) *In the Age of the Smart Machine*. New York: Basic Books.

著者略歴

リジー・リチャードソン (Lizzie Richardson) は、人文地理学およびそれ以外の分野から文化、経済、政治へのアプローチを取り入れながら、イギリスの都市生活を研究している。2014年にダラム大学地理学科で博士号を取得後、ケンブリッジ大学で人文地理学の講師を務め、2016年にレヴァーハルム・アーリー・キャリア・リサーチ・フェローとしてダラム大学に戻る。